

ボードレールの「悪」の意識について

Sur la conscience du Mal de Baudelaire

沖津ミサ子*

(平成 14 年 8 月 26 日受付/平成 14 年 10 月 28 日受理)

要約：ボードレールの悪の意識は彼の宗教的哲学的思想の根底を成すものである。クレマン・ボルガルやバンジャマン・フォンダーヌも指摘しているように、ボードレールの信条はニーチェのそれに非常に近いものと思われる。ニーチェは神の死を宣告したが、それより先すでにボードレールは神の不在を表明しキリスト教への反逆を企てた。彼はキリスト教による救済を拒否し、自分の罪は自分自身によって贖おうとした。すなわち彼は自分の内に存在する悪を認識し、凝視し、そこから生じる苦悩を深く苦悩することによって罪を贖おうとした。《苦悩こそ唯一の高貴》と唄って、苦悩こそが自分の魂を浄化しうる唯一の手段であると信じた。その結果ボードレールは過剰な程に悪の意識にとりつかれてしまう。そのことについてボードレール自身「苦悩の錬金術」の中で《僕は黄金を鉄に、天国を地獄に変えてしまう》と嘆いている。

こうしたボードレールの思想は当然、深い内省心に支えられねばならない。そのことについてボードレールは「救いがたいもの」(二)の中で《心が自分自身を映す鏡となる 暗くしかも透明な差し向い 青白い星かげのゆらめく 明るくて暗い「真理」の井戸！ 皮肉な地獄の燈台 悪魔的恩寵の松明 唯一の慰めであり 栄光である－「悪」の中に居ると意識は！》と唄っている。

ヨーロッパの伝統的宗教であるキリスト教に反逆を企てたボードレールは 彼独自の教義を唱えた。そして、その思想の根底にあるのが「「悪」の中に居ると意識」であり「苦悩こそ唯一の高貴」であり、「苦悩の錬金術」である。こうしたボードレールの思想は良心の呵責を歌った普遍的真理となった。

キーワード：「悪」の意識, anti-Christ, 苦悩の錬金術, 良心の呵責

ボードレールの詩集『悪の華』には「悪」が非常に大きなテーマとして扱われている。それは単に、彼の特異な感受性とか嗜好によるものではなく、彼の宗教的哲学的思想を表明するための意図的なものであると言えよう。

ボードレールは二千年近くも信じられてきたキリスト教というヨーロッパの宗教に反逆を企てた。彼は彼独自の信条で生きようとした。すなわち彼は自分の内に潜む「悪」を認識し、凝視しそれより生じる苦悩を限りなく苦悩することによって、自己の魂の救済をはかろうとした。

こうしたボードレールの思想について、クレマン・ボルガルは次のように指摘する。「実際ニーチェの図式が彼の場合もっともふさわしいと私には思われる」¹⁾

又、バンジャマン・フォンダーヌも次のように述べている。

「ボードレールの信条はニーチェのそれに非常に近いものではなかったか。」²⁾

ではニーチェの思想とはどんなものであるか。哲学者山崎庸佑氏によれば、

「ニーチェの思想は、はじめに『汝なすべし』を規定した神の死があり、真中にそれからくるニヒリズム、そして最後に、このニヒリズムの自己超克、すなわち超人による永

劫回帰のニヒリズムといった統一的思想関連」であると言われる³⁾。

又、ゲオルク・ズィークムンドは次のように言っている。

「ニーチェにあっては、『神は死せり』という言葉は、なお『アンチ』とか『反対の』という意味を持っており、本質的に反抗した相手に関係づけられている。ニーチェの反対運動はしかしながら、拒絶された当の対象が反対感情それ自身を強制することなく、意味喪失の淵に落ち込むことによって、かえって一層強められなければならない。この結果生じたニヒリズムは西欧の根本的運動といえよう。現代人は意識的にこのニヒリズムを自己の問題として引き受けなければならない。神の消滅した権威の代わりに、良心の権威が登場し、理性の権威が競り合うこととなる」⁴⁾

すなわち神の死後の良心の権威を問題にしたのがボードレールであり、理性の権威をテーマにしたのがニーチェといえよう。

ボードレールはキリスト教という宗教によって、自己の罪から救済されることを拒否した。すなわち彼は自己の内に存在する悪を深く認識し、それより生じる苦悩を自ら苦悩することによって罪を贖おうとした。

* 東京農薬大学応用生物科学部

詩集の序ともいえる詩篇「読者に」には、まず人間の内に潜む悪の認識がなされ、それに対する安易な態度が指摘されている。

La sottise, l'erreur, le péché, la lésine,
Occupent nos esprits et travaillent nos corps,
Et nous alimentons nos aimables remords,
Comme les mendiants nourrissent leur vermine.

Nos péchés sont têtus, nos repentirs sont lâches ;
Nous nous faisons payer grassement nos aveux,
Et nous rentrons gaiement dans le chemin bourbeux,
Croyant par de vils pleurs laver toutes nos taches.

訳

愚行、過ち、罪、吝嗇に、
心はふさがれ、身は嘔まれ、
乞食が虱を飼うように、
愛しき悔恨を飼う我ら。

我らの罪は執念深く、後悔の方はだらしがない、
懺悔の報酬を過分に受け、
安ばい涙で心の汚れはいっさい洗い清めた気になっ
て、
いそいそと、泥濘道へと舞い戻る。

ここでは人間の本質的な悪が取りあげられ、しかも、そうした悪を安易な懺悔によって済ませて、後はまるで他人ごとのように聞き流そうとする読者をも「偽善者の読者よ」と鋭く呼びかけて告発している。これは又当時の形骸化したキリスト教批判とも受けとれる。

この詩が1855年『両世界評論』誌に他の十七篇の詩とともに『悪の華』の題名下で発表された時には、次のような題辞が添えられていた。

「呪うべき事はみな、忘却の井戸へ投げ込むか、墓穴へ埋めてしまふに限ると言われている。書物に悪を書きとめて、それを暴き立てると、後の世の美俗を墮落させると言われている。しかし私は信じない、知識が不徳の母だとも、無知の娘が美德だとも。」

この詩にも又、キリスト教批判の思想が伺える。最初の二句では民衆の倫理的、道徳的墮落を指摘していると同時に、安易な告白による救済を説く、当時の形骸化したキリスト教を誹謗したものとも言われている。「知識が不徳の母であり、無知の娘が美德である」というのも明らかにキリスト教の方針を揶揄したものと言える。これは16世紀から17世紀にかけての宗教戦争時代に活躍した詩人ドービニエの『悲愴曲』第二巻からの引用だが、19世紀のニーチェの次のようなキリスト教批判と酷似している。

「キリスト教という宗教は、全く、感情への耽溺と知性の

貧困のあらわれに過ぎない。その信仰はあらゆる懐疑を禁圧し、知性の活動を阻む。奇跡のような不合理が、キリスト教の核心をなしているのも、そのためである。」⁵⁾

ところで先の題辞は、初版には添えられていたのに、再版では削除されている。ではなぜ再版で割愛したのか。それは初版の時には、詩集が反宗教的と検閲で非難されるのを懼れて、他人の詩を弁解のようにつけておいたのではないか。しかし当時はすでに全ヨーロッパ的にアンティキリスト教の嵐が吹きあれていた時代であるから、「聖ペテロの否認」や「悪魔への連禱」といった『叛逆詩篇』があるからといって、格別反宗教的という非難を受けるようなことはなかった。それゆえ再版ではこの題辞をとりさげたものと思われる。

キリスト教によれば、人間の原罪はイエス・キリストによって贖罪された。民衆は神キリストを敬愛し、クレドを遵守さえすれば救済されるという。

これに対してボードレールは自分の罪は自分で贖おうとした。これは神をすてて、自我という主体性を堅持することで、ニーチェの超人の思想と共通していると言える。

ヘーゲルからショーペンハウワーと受けつがれて来た無神論的哲学は、ニーチェに至ってなれば宿命的に神の死が宣告されたわけだが、ボードレールも又すでに神の不在を暗示している。それは『叛逆』詩篇の中の「聖ペテロの否認」の中で次のように歌われている。

Qu'est-ce que Dieu fait donc de ce flot d'anathèmes
Qui monte tous les jours vers ses chers Séraphins ?
Comme un tyran gorgé de viande et de vins,
Il s'endort au doux bruit de nos affreux blasphèmes.

Les sanglots des martyrs et des suppliciés
Sont une symphonie enivrante sans doute,
Puisque, malgré le sang que leur volupté coûte,
Les cieux ne s'en sont point encor rassasiés !

訳

神は一体、どうなさるつもりか、愛しき熾天使目がけて
毎日下界から昇ってくるこの呪詛の大波を？
肉と酒とに飽満した暴君さながらに、
神は平然と我らの恐ろしい冒瀆の叫びを、子守歌と聞いて眠っている。

殉教者や死刑囚のすすり泣きは、
どうやら心酔させる交響楽というところか、
なぜなら、彼らの快楽の代償に流される、血のことなど気にもかけず、
天は今でもそれに満足しないのだから。

人間が冒瀆の言葉を投げかけようと、あるいは反対に信仰のために血を流そうと、神はいかなる反応も示さないと

いう。これは明らかに神の不在を暗示していると言える。

ところで詩集『悪の華』は題名が二度変えられている。即ち 1846 年には『レスボスの女たち』と呼ばれていたのが、1848 年末頃には『冥府』⁹⁾と変更され、1855 年の『両世界評論』誌で初めて『悪の華』となった。

一般に詩集の総題は、必ずしも詩集の総体的な意味を表しているわけではないが、ボードレールの総題のつけかたは、詩集全体の内容に対して、多分に暗示的かつ象徴的である。それゆえ、これらの題名には共通したボードレールの何らかの意図があったものと思われる。

まず最初の『レスボスの女たち』であるが、これについてクレベとブランの研究書では、当時女性の同性愛が流行していて、レスボスの登場する作品が非常に多かったと述べ、次のように解説している。

「このレスビエンヌの愛はボードレールに於いては、彼のより深い熱望にかなっている。すなわち宗教的思想から来る反自然的なものの賛美、あの本能に対する嫌悪、又美的法則から彼を絶えまなき人工美の追求へとかりたてた、不毛の美に対する崇拜、そして最後に人間に定められた限界から逃れようとした《無限の嗜好》^{よこしま}といった熱望にかなっている。又多分 邪な情欲によって彼もレスビエンヌの乱れた愛へと心ひかれていたということを否定するわけにはいかないだろう。しかしこの魅力から離れて、ボードレールはモラリストとして時には厳しく、又時には憐憫をもって、ロマン派作家として、又クリスチャンとして彼女達を裁いている。……

彼、ボードレールは、この《奇妙な行為》を地獄行の途中でのものとし、まさに《地獄墮ち》の背景の内に見ている」⁷⁾

以上がクレベとブランの注釈の一部であるが、ここではボードレールの詩「レスボス」に表されている以上に、注釈者のレスビエンヌに対する憎悪が感じられ、注釈者がいかにキリスト教的心情が厚いかが伺われる。

ところで注釈者のいうようにレスビエンヌの愛が彼の深い熱望にかなっていたとしても、ただそれだけで《地獄墮ち》の女性たちの名を詩集のタイトルにするだろうか。

この詩篇「レスボス」に歌われているレスビエンヌについて、クレマン・ボルガルは次のように述べている。

「宗教上罪ばかり女性たちは、深く愛したためでなく、深く悩んだがために許される。《劫罰を受けた女性たち》の懲罰は彼女たちの快楽から生じ、レスボス島は《熱望する心に絶えず課せられた永遠の苦悩から赦し》を引き出すだろう。同様に《至上の能天使の命令》によって人間に^{つか}違わされた苦悩は、聖なる慈悲の贈物として、我々の不浄なもののいっさいを消す薬と見なされなければならない。」⁸⁾

以上のボルガルの見解こそボードレールの詩篇「レスボス」の正しい解釈といえよう。

ボードレールは人間に内在するすべての悪を認め、それゆえに生じる苦悩を苦悩することによって罪を贖おうとした。そうした意味でボードレールは、アンティキリスト教的立場から故意に、キリスト教では禁圧されている同性愛

をキリスト教的悪の象徴として取りあげ、彼女達の罪もその苦悩ゆえに許されるという彼の思想を表明しようとしたのではないだろうか。もっともすべての「アンティ」がそうであるように、単なる反抗運動としてのボードレールの思想も、彼の反抗する対象の本質、すなわちキリスト教の本質による拘束を免れないのは確かである。換言すれば、ボードレールの思想もその基盤に於いては、キリスト教の本質に拘束されており、ここでレスビエンヌを地獄墮ちの女性としているのも、そうしたキリスト教的思想の拘束の表れと言えるだろう。

次に『冥府』であるが、クレベとブランのノートでは次のように定義している。

「『冥府』の原語ランブとは縁とか、ヘリを意味しそこから地獄と天国の境にある不確かな地帯をさす。そこでは洗礼によって罪を贖われなかった子供とか、心の貧しい者とか、キリスト生誕以前に死亡した正義の人達が、原罪を負うたままにいる所、そこからは、ただ楽園が見えるのみで入ることは出来ず、永久に待ち望んでいる場所であり、悩める魂が永遠にさまよえる曇った涙の土地。」⁹⁾

又、チボーデは、詩集の題名としては、この『冥府』のほう詩の特質をはるかに良く表わしていると述べて、その言葉の意味を次のように定義している。

「これはすでにカシミール・ドラヴィニユが詩のテーマにしたこともあり、聖伝によれば、冥府とはあの世の地図での第四地帯とされ、天国でもなく煉獄でもなく地獄でもない所、そこでは喜びも苦しみもなく、洗礼を受けずに死んだ子供たちや、非キリスト教徒である異教徒や、誠実で素行のよい異端者たちのための地域である。なお聖伝によれば、カトリック教会は全く認めておらず、カトリックの公教要理でも無視されている地域であるとされている。」¹⁰⁾

二人の以上のような定義からも分かるように、冥府とはキリスト教徒でない善人のための、あの世での場所であり、しかもカトリック教会では全く認められていない地帯であるという。これから推察するとボードレールは、冥府という題名によって、非キリスト教的世界を暗示しようとしたものと思われる。

先にも述べたようにボードレールは、キリスト教による安易な救済を拒否した。彼は自己の内に潜む悪を凝視し、それより生じる苦悩を一身に引き受けることによって、彼独自の魂の浄化法を見い出そうとした。

この自己凝視については、「シテールへの旅」の最後の句《あゝ主よ、嫌悪の情なく、我が心と肉体を眺めうる力と勇気を我に与え給え！》が何よりも明白に表わしていると言える。これは又ニーチェの思想の特徴の一つである真実の凝視とも共通している。山崎庸佑氏によれば、「ニーチェの成熟期の思想は透徹したベシズム、つまりフランス・モラリストとイギリスの功利主義にならった、懷疑主義とされている。そこでは、生からそのヴェールを剥ぎ、生の真相をのぞき見るのは恐ろしいことだとされるが、しかし真実の凝視（知的誠実）は人間に残された最後の尊厳とされる。」¹¹⁾ というものである。

ボードレールの自己凝視より生じる苦悩については、詩

集の最初に置かれている「祝禱」の中でかなり高揚した調子で次のように歌われている。

—«Soyez béni, mon Dieu, qui donnez la souffrance
Comme un divin remède à nos impuretés
Et comme la meilleure et la plus pure essence
Qui prépare les forts aux saintes voluptés !

«Je sais que vous gardez une place au Poète
Dans les rangs bienheureux des saintes Légions,
Et que vous l'invitez à l'éternelle fête
Des Trônes, des Vertus, des Dominations.

«Je sais que la douleur est la noblesse unique
Où ne mordront jamais la terre et les enfers,
Et qu'il faut pour tresser ma couronne mystique
Imposer tous les temps et tous les univers.

訳

祝福あれ、わが主よ、あなたの賜える苦悩こそ
われらが穢れを浄める霊薬
聖なる悦楽へと強者を導く
至上にして至純のエキスなのです！

私は知っている、聖なる「国」の至上、至福の序列の
中に
あなたは「詩人」のために席を設け、
座天使、力天使、主天使といった天使たちの
永遠の饗宴に「詩人」を招き給うことを。

私は知っている、苦悩こそ唯一の高貴なもの
これには現世も地獄も決して嘯みつけず、
私の神秘的な王冠を作るためには
あらゆる時代、あらゆる国に申しつけねばならないこ
とを。

この詩についてピエール・エマニュエルは次のように述べている。

「神は救済の手段として苦悩を与える。彼は詩人に、この苦悩の申し子、すなわち天命により苦悩を自ら引き受け、あらゆる時代と世界をかけて、苦悩を集中させるこの苦悩の申し子に対して、彼の試練にふさわしい天使の栄光を享受するように促す。『悪の花』の最後の詩篇「静思」の中で詩人が自らの魂に呼びかけるように、呼びかけているこの苦悩は、詩集の最初の作品「祝禱」では、なおはるかに多く歌われている。」¹²⁾

このことについてクレマン・ボルガルは「神が我々に、
《我々の穢れに対する神聖な薬として》苦悩を与えたとい
うことを彼は忘れていないし、《苦悩だけは現世も地獄も
決して嘯みつくことの出来ない唯一高貴なもの》であると
いうことを知っている。」¹³⁾と述べ、更に又
「信条への全面的同意から解放されていた彼の倫理は、

単純な苦悩の哲学に要約しうるものである。」¹⁴⁾とも言っている。

以上で分かるようにボードレールは、自己をほりさげ、自己の内の悪を凝視し、それによって生じる苦悩を深く苦悩することによって己の魂を浄化しようとした。だがその結果彼は、過剰なまでの悪の意識にとりつかれてしまうことになる。そのことについては彼は、「苦悩の錬金術」の中で次のように歌っている。

Hermès inconnu qui m'assiste
Et qui toujours m'intimidas,
Tu me rends l'égal de Midas,
Le plus triste des alchimistes ;

Par toi je change l'or en fer
Et le paradis en enfer ;
Dans le suaire des nuages

Je découvre un cadavre cher,
Et sur les célestes rivages
Je bâtis de grands sarcophages.

訳

僕を助けてくれてしかも常に僕を
おびえさせた未知の神ヘルメス¹⁵⁾よ、
あなたは僕を世にも悲しい錬金術師
ミダス王¹⁶⁾のようにしてしまう。

あなたのせいで僕は黄金を鉄に
天国を地獄に変えてしまう。
白雲の経帷子の中に

僕はいとしい人の亡骸を見出し、
天の岸辺のほとりに
大石棺を築きあげる。

このように苦悩の錬金術師となったボードレールは、すべてを暗く苦渋に満ちたものに変えてしまう自分自身を嘆いている。ここでいう苦悩の錬金術とは又、苦悩による魂の浄化をも暗示しているように思われる。

キリスト教を否定して、彼独自の主義に従って生きようとするボードレールの悪戦苦闘ぶりは、詩篇「救いがたいもの」で次のように歌われている。

Une Idée, une Forme, un Être
Parti de l'azur et tombé
Dans un Styx bourbeux et plombé
Où nul oeil du Ciel ne pénètre ;

Un Ange, imprudent voyageur
Qu'a tenté l'amour du difforme,
Au fond d'un cauchemar énorme

Se débattant comme un nageur,

Et luttant, angoisses funèbres !
Contre un gigantesque remous
Qui va chantant comme les fous
Et pirouettant dans les ténèbres ;

Un malheureux ensorcelé
Dans ses tâtonnements futiles,
Pour fuir d'un lieu plein de reptiles,
Cherchant la lumière et la clé ;

訳

青空より出でて「天」の
いかなる眼差しも届かない
泥ぶかい鉛色の三途の河に落ちこんだ
一つの「思想」、一つの「形態」、一つの「存在」。

奇異なものへの愛にひかれた
無謀な旅人
怪しき悪夢のどん底で
泳ぎ手のごとく身を泳ぎ、

狂人のごとく歌いつつ
暗闇の中を旋回しながら
大逆流にさからって、
死ぬほど苦しい良心の呵責と戦う一天使。

爬虫類のむらがる場所より
逃れようとして、
光と鍵を探し求め、
無益な模索のうちに
惑う哀れな男。

この詩の最初の四行について、クレマン・ボルガルは「人間の《救い難い運命》の《明白な象徴》であり、《完璧な描写》はこのようなものである。」と言っている。しかしこれは人間のではなくて、詩人ボードレールのではないだろうか。この最初の四行の詩が人間の救い難い運命の一般的な状況を表わしているとすれば、この後の一連の詩の意味がかなり不明瞭で曖昧なものになってしまうように思われる。ここで言う《一つの思想》《一つの形態》とはやはり、反キリスト教としての彼の思想形態であり、《一つの存在》とはそうした思想のもとで生き抜こうとする詩人自身を指しているのとるべきではないだろうか。更にいえば、それが無謀な旅人であり、キリスト教という大逆流にさからって、死ぬほど苦しい良心の呵責と戦う一天使ということになる。しかも反キリスト教徒として詩人が戦う相手は、結局いつも自己の内に潜む悪魔であることは確かなのだ。

キリスト教を否定して生きることの困難さを表わしているニーチェの言葉に次のようなものがある。

「コンパスも案内人もなしに絶望の海に思い切って乗り出すことは、未熟な多くの人には愚行であり破滅である。大抵の人は嵐に打ちのめされ、ただ僅かな人だけが新しい大陸を発見する。……神の存在とか不滅、聖書の権威や靈感といったものは常に問題として残されるであろう。私はこれら一切を否定しようとした。あゝ破壊することはたやすいが、築きあげることは……二千年というもの人類は欺瞞と幻影によって誤り導かれてきたのではないかという絶望、自分の不遜と蛮勇ともいえる感情、これらすべてはただ果しない戦いを戦うのである。……」¹⁸⁾

《光と鍵を探し求め、無益な模索のうちに惑う》詩人ボードレールと《新しい大陸を発見しよう」と果しない戦いを戦う》哲学者ニーチェとの二人の姿が酷似していないだろうか。

一方ボードレールの重要なテーマの一つに、キリスト教によって否定された、あらゆる人間性の奪回がある。すなわちキリスト教では悪とされて来た人間本来の特性を容認し、擁護することである。そうした思想の内容が反逆詩篇の中の「悪魔への連禱」でかなり詳細に述べられている。その連禱のいくつかをここに抜粋してみると、

Ô toi, le plus savant et le plus beau des Anges,
Dieu trahi par le sort et privé de louanges,

Ô Satan, prends pitié de ma longue misère !

Toi qui, même aux lépreux, aux parias maudits,
Enseignes par l'amour le goût du Paradis,

Ô Satan, prends pitié de ma longue misère !

Toi qui fais au proscrire ce regard calme et haut
Qui damne tout un peuple autour d'un échafaud,

Ô Satan, prends pitié de ma longue misère !

Toi qui, pour consoler l'homme frêle qui souffre,
Nous appris à mêler le salpêtre et le soufre,

Ô Satan, prends pitié de ma longue misère !

Toi qui poses ta marque, ô complice subtil,
Sur le front du Crésus impitoyable et vil,

Ô Satan, prends pitié de ma longue misère !

訳

おお御身、天使の中の最も博識にして美わしき者よ、
運命に裏切られ、讃歌を奪われたる神よ、

おお悪魔よ、わが久しき悲惨を憐れみ給え！

賤民にも、呪われし非人にも、
愛によりて天国の味を教えてくれる御身、

おお悪魔よ、わが久しき悲慘を憐れみ給え！

断頭台をとり巻く物見高い群衆を見下すような
威厳ある眼差を、死刑囚に与えてくれる御身、

おお悪魔よ、わが久しき悲慘を憐れみ給え！

病苦に悩む人を慰めるため
硝石と硫黄を混ぜ合わせ火薬の調合を教える御身、

おお悪魔よ、わが久しき悲慘を憐れみ給え！

おお明敏な共犯者よ、冷酷で卑劣な
富豪の額に地獄行の烙印を捺す御身、

おお悪魔よ、わが久しき悲慘を憐れみ給え！

ここでの悪魔とは、知識欲や、愛のすばらしさや、人間の矜持や、自殺の自由といったキリスト教では認められていない人間性を与えてくれる者であり、そして結局《父なる神キリストの逆鱗にふれて、この地上なる樂園より追放された人達すべての養父》なのである。

このことについてピエール・エマニュエルは次のように述べている。

「『悪魔への連禱』の中に、詩人が自らに求めたあの《（仮装した）宗教》の例を見るのは独断ではない。悪魔とは＜神＞にこの上なく似た＜神＞の完璧な似姿をしている地獄に墮ちた人、あるいは又、絶対的に＜神＞なきひとつの神。責苦の中で、自らを神と等しきものにしようと願い、たえず自らを超越しようと努力しながら、決して超越出来ない無力さをいかなる時も感じている存在。」¹⁹⁾

以上でも解るように、キリスト教によって失われた人間性の奪回こそボードレールにとって何よりも重要なことであった。そして更に、そうした人間性の総てを認めるがゆえにもたらされる苦悩を果てしなく悩むこと。それこそ魂の浄化の唯一の方法であるとボードレールは確信している。

当然のことながらボードレールのこうした思想は、何よりも深い内省心に支えられねばならない。自分をみつめ自分を裁くこと。すなわち良心の呵責をいかに深く感じる事が出来るかに関わってくる。そのことは詩篇「我と我が身を罰するもの」の中で次のように諧謔的に表わされている。

Je suis la plaie et le couteau !
Je suis le soufflet et la joue !
Je suis les membres et la roue,
Et la victime et le bourreau !

Je suis de mon coeur le vampire,
—Un de ces grands abandonnés
Au rire éternel condamnés,
Et qui ne peuvent plus sourire !

訳
僕は傷であって刀^{かたな}なのだ！
打つ手であって打たれる^{ほう}頬！
轢かれる手足、轢く車、
犠牲者であり、死刑執行人！

僕は自分の心の吸血鬼、
——永遠の笑いの刑に処せられて
もう微笑むことも出来ない、
偉大な見捨てられし者の一人なのだ！

このことについてクレマン・ボルガルは次のように述べている。

「最後の頼みの綱は、苦悩そのものの中にある。もし詩人が彼自身の心の吸血鬼であるとしても、彼は又裁判官であり、死刑執行人でもある。」²⁰⁾ 更にボルガルは次のようにも述べている。

「『我と我が身を罰する者』すなわち自分自身の死刑執行人、自分に懲罰の鞭^{むち}を課しながら、詩人は彼自身の刷新者となる。」²¹⁾

一方「救いがたいもの」(二)ではその優れた内省心がかなり誇らしげに表現されている。

Tête-à-tête sombre et limpide
Qu'un coeur devenu son miroir !
Puits de Vérité, clair et noir,
Où tremble une étoile livide,

Un phare ironique, infernal,
Flambeau des grâces sataniques,
Soulagement et gloire uniques,
—La conscience dans le Mal !

訳
心が自らを映す鏡となる
暗くしかも透明な差し向かい！
青白い星かげ一つまたたく、
明るくて暗い「真理」の井戸！

皮肉な地獄の燈台、
悪魔的恩寵^{ないまつ}の松明、
唯一の慰めであり栄光である、
——「悪」の中に居るという意識は！

しかしこうした誇りをもボードレールは厳しく凝視して次のように述べている。

「我々は、告解者であるとともに、聴罪司祭であるという

一種冒瀆的な方法で、悔悛の秘蹟を模倣しながら、自らに安易な罪障消滅の宣告をしてきた、そして尚悪いことに、自己の有罪宣告から、傲慢のための新たな糧をひき出してきたということが分かった。」²²⁾

これに対してエマニュエルは次のように言っている。

「この批判はしかし、ボードレールが《暗くしかも透明な差し向かい》のカタルシス的な効力を認めていないということを意味しているわけではない。知られざるヘルメスや目に見えぬ魔王リュシフェールの中に彼は、正しい言葉で人間に自己のほんとうの意味と、手の届きうる唯一の救済とを知らせてくれる、謎の使者を予感している。」²³⁾

キリスト教というヨーロッパの伝統的宗教に対して、反逆を企てたボードレールは、それに代わる彼独自の教理をうち立てた。それが「苦悩こそ唯一の高貴」であり、「苦悩の錬金術」であり、「悪の中に居るという意識」である。この彼の思想は反キリスト教というテーマを越えて、「良心の呵責」を歌った普遍的真理となった。

注

- 1) Clément BORGAL, 1961. BAUDELAIRE. p. 66.
- 2) Benjamin FONDANE, 1972. Baudelaire et l'expérience du gouffre. p. 293.
- 3) 山崎庸佑著, 1970. ニーチェと現代の哲学 p. 105.
- 4) Georg SIEGMUND, 谷口 泰訳, 1965. ニーチェの宣告「神の死」p. 43.
- 5) 山崎庸佑著, 1970. ニーチェと現代の哲学 p. 157.
- 6) 詩集が出版される前に『冥府』という題名が他の書物に使用されてしまったため『悪の華』と改題された。
- 7) J. CRÉPET et G. BLIN, 1939. Les FLEURS DU MAL, NOTES CRITIQUES. p. 274.
- 8) Clément BORGAL, 1961. BAUDELAIRE, CLASSIQUES DU XIX^e SIECLE. p. 72.
- 9) J. CRÉPET et G. BLIN, 1939. Les FLEURS DU MAL NOTES CRITIQUES. p. 275.
- 10) Alb. Thibaudet, Histoire de la Littérature, stock éd. p. 325.
- 11) 山崎庸佑著, 1970. ニーチェと現代の哲学 p. 103.
- 12) Pierre EMMANUEL, 1967. Baudelaire, Les écrivains devant Dieu. p. 148.
- 13) Clément BORGAL, 1961. BAUDELAIRE, CLASSIQUES DU XIX^e SIECLE. p. 61.
- 14) 前出. p. 71.
- 15) 古代エジプトの神。錬金術の守護神。
- 16) バッカスから、手に触れる物すべてを黄金に変える力を与えられるが、食物まで手にとるや黄金に変わってしまい困ったという。
- 17) Clément BORGAL, 1961. BAUDELAIRE, CLASSIQUES DU XIX^e SIECLE. p. 93.
- 18) ニーチェ全集, クラシカー版三巻 p. 61.
- 19) Pierre EMMANUEL, 1967. Baudelaire, Les écrivains devant Dieu, p. 99.
- 20) Clément BORGAL, 1961. BAUDELAIRE, CLASSIQUES DU XIX^e SIECLE. p. 61.
- 21) 前出. p. 74.
- 22) Les Paradis Artificiels 59.
- 23) Pierre EMMANUEL, 1967. Baudelaire, Les écrivains devant Dieu, p. 103.

On the consciousness of evil of Baudelaire

By

Misako OKITSU*

(Received August 26, 2002/Accepted October 28, 2002)

Summary : As the title shows, the consciousness of evil occupies the greater part of the collection of poems, "The Flowers of Evil".

What does this consciousness come from ? It contains many different elements, but it mainly results from Baudelaire's religious thought.

He was an atheist, and couldn't believe in God.

According to Christianity, it is said that Jesus Christ redeemed men from sin, so men are saved only if they love Christ as well as God.

But Baudelaire did not want his own salvation by being Christian.

He tried to revolt against Christianity, blaming for its easy confession of that time. He was convinced that nothing but the pangs of conscience could make atonement for his sins.

And then he wanted to recover the humanity which he saw as refused by Christianity.

He recognized all sorts of humanity. As a result he suffered a consciousness of evil which was included in humanity.

It is true to say that his greatness consists in the deep reflection on himself.

Key Words : the consciousness of evil, anti-christ, Alchemy of the pangs, the pangs of conscience

* Faculty of Applied Bio-Science, Tokyo University of Agriculture